

第2回 沖縄県で開催する国スポ・全スポに関する懇話会
議事要旨

日 時：令和6年8月21日（水）13:30～15:30

場 所：県庁6階第2特別会議室

出席者：宮城委員（座長）、平良委員、親川委員、荷川取委員、淵辺委員、山入端委員、山城委員、慶田花委員、濱本委員

- 次 第：1. 開会
2. 前回会合の振り返り
3. 審議事項
 (1) 提言書（素案）について
 (2) その他意見交換
4. 報告事項
 (1) 3巡目国スポの見直しに関する全国知事会の考え方について
5. 閉会

議事要旨：

審議事項

- (1) 資料2に沿って、宮城スポーツ振興課長から説明を行い、その後質疑応答を行った。これに対する以下の意見があった。

(委員)

- ・P5「コンパクトな大会」というのは、どういう意味でコンパクトとしているのか。
- (事務局) 現在議論されている3巡目国スポの見直しにおいても、開催地自治体の人的・財政的負担が大きいため、効率化を図っていくべきという観点から、「コンパクト」という言葉が用いられている。施設整備なども基準を緩和してもらうことで必要以上の予算をかけない方法を検討していくこととしている。
- (委員) 人的・財政的負担がかかるから「コンパクト」ということではなく、官民一体となって、どうやって人を集めるか、どうやって資金を集めるかという知恵と工夫が必要なのではないか。「コンパクト」という言葉を使うことで少しニュアンスが違ってくと思う。
- (座長) 「コンパクト」という表現が、マイナスのイメージを持ってしまうという事だと思う。合理性を追求していくと、開催する意味も薄れて

いくという懸念である。

- (事務局) 今見直しの議論の中心となっているのは、施設整備にかかる費用である。施設の基準を緩和することで自治体の負担も大きく軽減されると考えられる。また国や日本スポーツ協会の財政負担を増やすことも要望しているところである。ここでいうコンパクトという言葉の趣旨は、競技大会そのものの縮小ということではなく、全国的な見直しの動きを踏まえた表現となっている。
- (座長) 全国的な見直しの動きを踏襲する部分は踏襲して、沖縄らしさは出していくというスタンスで良いのではと思う。

(委員)

- ・ P2の「多様性社会に適用できているか確認できる絶好の機会」という表現には違和感がある。
 - ・ P4の「スペシャルオリンピックスとの連携」という記載は、他の障害者スポーツ大会もたくさんある中で、1つの大会のみを取り上げる記載は考えた方が良いのでは。
 - ・ P6で「国スポ」のみの記載となっている箇所が複数見られるため、「全スポ」が置いて行かれないように気を付けてもらいたい。
- (座長) これらの表現については、事務局の方で修正をお願いしたい。

(委員)

- ・ パリオリンピックでは、選手の活躍が子どもたちに夢や希望を与えてくれたと思う。マスコミも個々のアスリートに焦点を当てて報道がなされていると感じた。競技力向上ばかり取り上げると違和感を持つ方もいるかもしれないが、2巡目国スポも、県出身選手が活躍し、子ども達に夢と希望を与えられるような大会としたい。それによって地域に活力を与えたい。
- ・ スポーツコンベンションの推進についても、国スポ開催を契機として、10年後は産業としてしっかりと根付くよう強化していきたい。

(委員)

- ・ P1の人材育成について、子ども達が中心となることには異論ないが、大人も夢や希望を持ちたいと思う。子どもにフォーカスを当てるだけでなく、大人も含めた記載にしてもらいたい。

(委員)

- ・沖縄県障害者スポーツ大会を県と連携して行っているが、アーチェリーの会場として現在使っている施設においては距離が足りないため、新たな施設に対する要望があがっている。この議論の中では、障害者がアクセスしやすい場所に作って欲しいという意見が多い。
- （事務局）会場地の選定については、今年度設置する準備委員会の中で、専門委員会を設置し、議論していくこととなる。障害者がアクセスしやすい場所という意見も踏まえて検討していきたい。

（委員）

- ・施設整備については、県の方で計画している様々なプロジェクトや、経済界でも取り組んでいるGW2050などに関連付けて、整備を進めていくという視点も取り入れてもらいたい。
- （事務局）県全体としての計画も見据えながら、中長期的な視点で施設整備を考えていきたい。
- （座長）この議論は前回の当真委員の発言にもあったように、市町村においても計画を持って施設整備等進めていくこととなるため、国スポもそれと抱き合わせで考えていきたいということであった。そのためには、早めに結論を出して早めに進めていくことが大切である。

（委員）

- ・前回資料の「目指す成果と意義のイメージ」の中で示されていた「ウェルビーイング」という視点に関連して、パリオリンピックでは、個人の能力を讃えるだけでなく、その人を支える周りの人たち（クルー）の貢献が報道されたり、選手たちも支えてくれた人たちに対する感謝を表現していた。
- 資料P1の人材育成に関する「勝ちたいという意欲やそのために努力する精神的な強さを養う」という文章のどこかに、「社会との一体感」や「共生社会での一体感」、「周りに支えられている自分を受け入れること」、「自分が貢献できているという幸福感」を培うという視点も入れてもらいたい。
- （座長）個人の精神的な強さは、周りのサポートなど、それに至るプロセスがあって成り立つものであると考える。この表現については、事務局と相談して修正したいと考えている。
- 「勝ちたい」という表現も、例えば「上達したい」や「成長したい」などの表現の方が今の時代に合っているかもしれない。「勝ちたい」という気持ちもアスリートの目線では無視できないところであるが、それが

もたらず様々な問題も考慮して考える必要があると思う。

(委員)

- ・ P 6 の「新しい国スポのあり方を創造する」という表現があるが、これについてもう少し説明をしてもらいたい。
- (座長) 3 巡目見直しの議論の結果を受けて、2 巡目国スポを開催する県としては、何を取り入れるか、取り入れないかという判断をしていくことになることから現時点では答えにくいかもしれない。私の捉え方としては、「新しい国スポのあり方」というのは、「沖縄らしい国スポのあり方」という意味と捉えている。
- (事務局) 座長がおっしゃるように、具体的に示すことは現時点では難しいが、10 年後に開催する大会は、これまでと同じように前例を踏襲していくというやり方ではなく、新しい価値観を見出して、地域のカラーを出していくということが必要であると考えている。

- ・ オリンピックを見ていて、メディアや SNS での広報が効果的であったと感じる。メディアとの連携とか発信という観点についてどう考えているか。知らない人は知らないまま終わっていくという今の大会のあり方を変えて、もっと人々の生活に入り込んでいくためにはどうしたら良いかという課題について、FACE TO FACE で情報発信できるツールとして SNS の活用などが考えられる。
- (座長) 一部の人たちだけのものにならないようにするには重要な視点である。
- (委員) 今の議論は、P7 の具体的な取組の方向性の中で市町村や観光協会、学校との連携という項目の中に含まれているという認識であったが、「県民一体となった取組」が弱くなっているという現状も踏まえ、メディアでの情報発信ということを追加した方が良いのか、検討した方が良い。
- (座長) 準備委員会で具体的に議論していく根拠となるため、提言書の中に明文化しておく必要があると考える。

(委員)

- ・ アスリート目線がどこに入っているのかという事が少し気になる。「勝ちたい」という気持ちはアスリートの思いであり、周りの人の支えによる一体感や貢献することによる喜びなど、アスリートが楽しいと思える大会という部分もどこかに入れて欲しいと思う。
- (事務局) アスリートの視点は非常に重要である。文言を精査して、そ

の視点が抜けているのであれば追加していきたい。

→ (委員) アスリートの皆さんが「楽しかった」というコメントをよく発している。周りの人に支えられて、やり遂げた時の一体感や喜び、満足感という思いを新しい国スポのあり方として入れていくことも重要である。

(委員)

- ・インターハイを最近終え、子ども達の頑張りや会場の熱気に触れ、スポーツの良さを改めて感じた。
- ・学校として、選手の育成、指導者の育成、ボランティアの育成など、人材育成にどう関わっていったら良いかという事を考えている。
- ・部活動をやっている生徒数もコロナ明けから減少傾向にあり、課題として地域と連携して取り組んでいく必要がある。
- ・中体連から意見があった、「関心がない人をどう巻き込んでいくか」という視点は非常に重要である。

(座長)

- ・人材育成について、スポーツ協会の別の委員会で、理学療法士会の方でも国スポ・全スポに向けて理学療法士の人材育成に早期に取り組む必要があるという指摘があった。県として早めに方向性を示して欲しいという意見があった。そのような周辺で選手を支える人の人材育成も進めていく必要がある。

(委員)

- ・アスリートの視点ということで少し国スポから離れてしまうかもしれないが、アスリートが安心して競技に取り組める環境として、セカンドキャリア・デュアルキャリアを具体的に描ける環境を作って欲しい。
- (座長) 日本は意外とアスリートをリスペクトしていない。オリンピックであっても生活が苦しいという人もけっこういる。県や市町村だけでなく、経済界全体として、スポーツで実績を出した人を支える仕組みを考えられないか。「アスリートにも優しい沖縄県」というのが実現できるとスポーツの人材育成も変わっていくと思う。

(事務局) 子ども達が安心してトップスポーツに飛び込んでいける環境というのは非常に重要である。スポーツ関連産業としてスポーツコンベンションの推進などに取り組んでいるが、それだけではやはり厳しい。経済界全体としても、スポーツに真剣に取り組んできた人の資質をしっか

り評価して、受け入れる仕組みができれば、安心して競技に打ち込むことができると思う。その仕組みづくりは行政の役割であると考えているのが、経済界としてもお力を貸していただきたい。

(委員)

- ・昨今では、このような大きな大会を開催するにあたっては、エネルギー問題、環境問題にも配慮が必要であるので、開催基本方針にも何らかの形で盛り込んでもらうことも検討の余地がある。

(委員)

- ・ヘルスツーリズムについて、タイでは、世界中からスポーツ選手が来て、体全体をリトリートメントし、健康的な食事も含めてトータルで健康になって帰ってもらうというツーリズムが定着している。沖縄でも国スポを機に、観光の質の向上、スポーツ関連産業の裾野を広げるといった視点からも取り組んではどうかと思う。
- (座長) 非常に重要な視点であり、今後 10 年をかけて、沖縄県が健康的な環境になっているという状況を作り出すことで、観光や海だけの目的ではなく人々が集まるという要素となり得る。また、沖縄県民の健康を維持する上でも、健康的な環境を整えることは非常に効果がある。

(2) その他意見交換

(委員)

- ・昨年の県総の改修工事では、体育館の中にバリアを作ってしまった。予算を有効的に使うために土木部局とスポーツ部局がしっかり連携して欲しい。
- ・障害者スポーツの審判員は絶対的に不足している。審判員の育成には時間がかかるので、早期に取り組んでいかなければいけない。

4. 報告事項

- (1) 3 巡目国スポの見直しに関する全国知事会の考え方について
参考資料 1 に沿って、宮城スポーツ振興課長から説明を行った。
質疑・意見は特になし

以上